礼拝　　２０２３年１０月１日（日）
題　『思い出す』
テキスト：ルカによる福音書１６章１９～３１節

皆さま、おはようございます。
今日の聖書の個所は一度読んだら心に残る個所だと思います。
死後の世界の話です。ここに集うわたしたちも早いか遅いかの違いだけで
いつか神に召される時が来ます。
芥川龍之介の短編小説に「蜘蛛の糸」という小説がありますが、
今日の聖書の話は、その小説に影響を与えているのではないだろうかと私には思えるのです。
イエスさまがされた今日のたとえ話は、聖書のことばを心に留めてこの世を生きて行くようにとの教えだと受け止めて良いと思います。
「◆金持ちとラザロ」の話です。
19:「ある金持ちがいた。いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。
紫の衣は地位の高い人が身につけ、麻布は、エジプト産の肌にやさしい、高級な下着といわれます。金持ちは、毎日ぜいたくに遊び暮らしていたのです。
20:この金持ちの門前に、ラザロというできものだらけの貧しい人が横たわり、
21:その食卓から落ちる物で腹を満たしたいものだと思っていた。犬もやって来ては、そのできものをなめた。
金持ちの門前に、ラザロという人が金持ちの憐みにすがるかのように置かれていたのです。ラザロは貧しく、十分に食べることもできず、その金持ちの食卓から落ちる物で腹を満たしたいものだと思っていたとあります。
加えて、皮膚にできものができて、そこに来た犬ができものをなめたという悲惨な姿が記されています。
　ただラザロということばには、「神は助ける」という意味があるのです。
彼は神の助けなしにはこの世を生きて行くことができなかったのです。
しかし、主イエスがされたこの話によれば、ラザロは最後には神の憐みを受けることになったのです。
「やがて、この貧しい人・ラザロは死んで、天使たちによって宴席にいるアブラハムのすぐそばに連れて行かれたのです。アブラハムはご存じの方が多いように、旧約聖書の最初の書物創世記に出てくる、その名の通り、イスラエルの「信仰の父」と呼ばれた人です。アブラハムは神の招きに従い、７５歳に

なってから神が示されるカナンの地に向かう旅を妻サラと共に出かけたのです。
　さて今日のは物語によれば、金持ちも死んで葬られました。
ラザロとは反対に、
「金持ちは陰府でさいなまれながら目を上げると、宴席でアブラハムとそのすぐそばにいるラザロとが、はるかかなたに見えた。」のです。（２３節）
陰府は、地獄と受けとめてよいと思われます。
　つまり、どんでん返しが起こっていたのです。この世を贅沢三昧、したい放題に過ごした金持ちは陰府、つまり地獄でさいなまれ、苦しい状態になり、一方この世で辛酸、苦難をなめつくしたラザロは、神に招かれ天国にいる信仰の父と言われるアブラハムのすぐそばで安らぎを得たのです。
アブラハムとラザロそして金持ちとの間は、はるかかなたといえる程の距離があったのです。生前の金持ちにははるかかなたに、アブラハムとラザロが見えたのです。この世では地位や富や権力を持つ人間や国が秩序を決めることが多いですが、永遠の視点でみれば、すべては全能なる、すべてを万事を益とされる神の御手の中にあるということです。
　そこで、この世で金持ちだった人は、苦しみに耐えられなくなり、
2 大声で言った。『父アブラハムよ、わたしを憐れんでください。ラザロをよこして、指先を水に浸し、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの炎の中でもだえ苦しんでいます。』(24 節)
　金持ちは、燃え盛るような炎の中にあり、体の外も内も燃えるような熱さに苦しんでいたのです。彼は耐えきれず大声で叫びます。「父アブラハムよ、わたしを憐れんでください。ラザロをよこして、指先を水に浸しわたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの炎の中でもだえ苦しんでいます。」と訴えることしかできなかったのです。
　苦しみ悶えている金持ちに、アブラハムは言ったのです。
「子よ、思い出してみるがよい。お前は生きている間に良いものをもらっていたが、ラザロは反対に悪いものをもらっていた。今は、ここで彼は慰められ、お前はもだえ苦しむのだ。」アブラハムは金持ちに「思い出す」ことを求めます。天国では逆転するということでしょうか。「今は、ここで彼は慰められ、お前はもだえ苦しむのだ。」生前、苦しみだらけであったラザロは、自分の名前通り、「神は助ける」という慰めを受けたのです。
更にアブラハムは、金持ちに語ります。
26:そればかりか、わたしたちとお前たちの間には大きな淵があって、ここからお前たちの方へ渡ろうとしてもできないし、そこからわたしたちの方に越えて来ることもできない。』と。

この言葉を聞いた金持ちは、
27:金持ちは言った。『父よ、ではお願いです。わたしの父親の家にラ
ザロを遣わしてください。
28:わたしには兄弟が五人います。あの者たちまで、こんな苦しい場所
に来ることのないように、よく言い聞かせてください。』と。
金持ちは、この世の秩序が天国でも通用するかのように思っていたのです。
自分自身についての反省や悔い改めはないのです。さて、わたしたちはどうでしょうか？
金持ちは後の世でも、ラザロを使用人のように扱っているようです。
彼に対してアブラハムは明言します。はっきりと言い切ります。
29:しかし、アブラハムは言った。『お前の兄弟たちにはモーセと預言
者がいる。彼らに耳を傾けるがよい。』
「モーセと預言者がいる。」旧約聖書のことばです。聖書のことばに耳を傾ける問、人は神によって変えられて行くのです。この世で生きている間にやっておかなければならないことがあるということだと思えます。
完全な人はいません。しかし、気づくことはできるはずです。今まで生きてきた人生を神とイエスさまの前で思い出すことです。
わたしは、人に対して謝らないといけないと思うことがあります。
誰にでもあるのではないでしょうか？金持ちはラザロに対して謝らなければならないことがあるのではないでしょうか。
しかし、それを理解しない、できない金持ちは、
30:金持ちは言った。『いいえ、父アブラハムよ、もし、死んだ者の中
からだれかが兄弟のところに行ってやれば、悔い改めるでしょう。』と反論するばかりです。
31:アブラハムは言った。『もし、モーセと預言者に耳を傾けないのな
ら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう。』」すでに聖書のことばという生きる糧、霊の糧が与えられているのです。心と魂を支えてくれるのです。わたしたちも、聖書のことばに出会い、言葉を思いめぐらすことによって、その人自身、深い気づきを与えられるのです。年齢に関係なく、人は人の心はよいように変えられて行くのです。主イエスと聖書のことばがこの世にあっては支えとなるのです。
神は、わたしたちがこの世でたとえ苦しみの中にあっても、心に平安を与えてくださり、確実に天の都へと導いてくださるのです。

皆様の上に主の平安をお祈りいたします。　共に黙想いたしましょう。